

花——思い出すままに

清水光子

かすかに水の流れる音がする。雪だけの水かしら、と思いつながら家の裏へ出てみました。あたりはまだ白一色ですが、子ども達が築山と呼んで小さなスキーのジャンプ台にしている高みの下あたりに小さな流れができてその音だったので。そして、その流れに沿って、何と、水仙の芽が、筆の穂のような蕾までつけて一面に出ているのです。驚き、否、感動でした。終戦間もない頃北海道旭川で迎えたはじめての春でした。「黒い土を夢に見るのよ」と言つて「大げさね」と笑われたものですが、半年の雪ごもりからようやく春のきざしを感じはじめた三月も末のあの時の感動は今も私の心に鮮やかによみがえってきます。水仙の蕾は日に日にふくらみ、家の北側などはまだ一メートル余の雪が積つて

いるのに芳香を放つて咲きはじめるのでした。

その頃、住んでいた師範学校の寮から、二十数人が巣立っていきました。北海道各地はもとより、内地のあちこちへ、若い教師として赴任する卒業生です。その卒業式に、その人達の胸を飾つてあげたい梅の花を、と姑が作りました。造花の道具は一切持つていた姑ですが、紙が手に入りにくいその頃、古い手紙の端や、古ぼけた半紙を使い、水彩絵の具でうす紅に染め、小枝は庭の木の枯枝を使いました。それまで私は造花がきらいでした。枯れないのがいやだなと思つていました。けれど、こうして姑に手伝つて作った小さな梅の花を胸につけ、晴ればれと、誇らしげに卒業式に出ていく若者達をみると、この造花にこめられた姑の心に胸をあつくしたのでした。

姑はいわゆるおひいさま育ちで、生花も深く身につけていた人ですが、路傍の花、野の花をその花にふさわしいさりげなさで生けて、身のまわりを清々しくする術のようなものを備えていました。特に菫

が好きで、雛祭に使ったはまぐりやさざえの殻に植えて机の上に置いて楽しんでいました。この董は東京の我家の日当りのよい窓の下に一面出ていたのですが、その室を払げるといので別の処へ移しました。その場所が董は気に入らなかつたのか、大へん少くなつてしまいました。それを知つたときの姑の悲しそうな顔、花にも心があつて、大事にされるとちゃんとそれに応えてくれるのよ、と語つていように思われました。はこべの花やはこぎさの花を、草むしりの時摘んで小さな壺に生けて仏壇に供えたりしましたが、それは幼い子ども達が「先生、あげる」となすなやかたばみの花を大事に包んで渡してくれるのと通じるように思われます。一本一本、花びらの一つ一つに丹精こめて菊づくりをしていのおすしやさん。「うちの藤のやつ、やつと今年一房つけましてね」と眼を輝かして告げる眼鏡屋さん、「こうしてさア、一本一本、そつとピンセットで移植するんだよ」とストックをつくる房州の友達、花を通しての知りあいほどの人も生き生きと、

子どものような素直な心で、私を落ち込みから救い出してくれるのです。

この間孫達が集つたとき何かの話から、眼が見えないのと、耳がきこえないのとどちらがつかいかと考えを言いあつていました。ちょうどそこにシクラメンの見事な鉢があつたのを小二の女の子が指して「あたしは眼がみえない方がつらいと思つて、だつて、こんなきれいな花が見えないなんて！」。それをききながら、不自由な人達の心の花に、どうしたらなつてあげられるか、を思つたことでした。

あの、「モモ」(ミヒヤエル・エンデ作)が、マイスター・ホラに逢い、見せられた「時間の花」時間の源、星の振子の往復で一つ一つちがひ、どれもあでやかな色と香りを持ち、咲いては散つていく場面。そして「地球が太陽を一巡りする間、土の中で眠つて芽を出す日 wait している種のように待つことだ」といふマイスター・ホラの言葉がこの頃、私の心の中に逞しい草のように一杯拵がつてはなれないのです。花が咲くには時間がまだまだかかりそうです。